

第2回御前崎市学校再編検討委員会会議録

日時 令和3年11月15日（月）午前9時30分開会
場所 御前崎市役所 3階 303会議室

- 1 開 会
- 2 教育長あいさつ
- 3 【テーマ】学校規模 1学校のクラス数 1クラスの人数について
 - ・個人発表
 - ・グループワーク
- 4 閉 会

第2回御前崎市学校再編検討委員会 出席者及び欠席者

御前崎市学校再編検討委員 10名 （欠席2名）

御前崎市教育委員会教育長 河原崎 全

御前崎市教育委員会事務局

教 育 部 長 長尾詔司

教 育 総 務 課 長 高田和幸

学 校 教 育 課 長 鈴木秀和

学校教育課指導主事 澤入基裕

教 育 総 務 課 係 長 川村美穂

教 育 総 務 課 係 長 坂本浩長

1 開 会

○司会（教育総務課長 高田和幸） おはようございます。時間になりましたので、第2回御前崎市学校再編検討委員会を始めさせていただきます。本日3名の委員から欠席ということで御連絡を受けております。1名の委員から少し遅れるので始めていてくださいとの御連絡が来ておりますので、始めさせていただきます。最初に互礼を交わしますので御起立をお願いします。お願いします。

[互いに礼]

○司会（教育総務課長 高田和幸） 御着席ください。会議の前に、今日、お配りさせていただきました資料の説明をさせていただきます。まず、最初に、検討委員会次第と書かれた2枚つづりの資料、小学校児童推移についての検討という資料を、本日、追加で配らせていただきます。こちらの資料につきましては、静岡理工科大学の水野先生が、人口統計に基づいて20年後、25年後の数字を出しております。資料中の令和2年の緑色の数字が実際の数字です。実際の数字では1,579名の小学生がいるわけですが、これが統計上進んでいくと、20年後には756名になりますという統計の数字だけを追ったものです。約半分になるということをおっしゃっております。更に、小学校児童推移分析のページで数字を見ていただきますと、2005年からの各小学校の児童減少を表した場合の角度を利用する、少し方向を変えた予測をかけたときに表される児童の人数を示した数字になります。どちらが正しいのか、わからないのも事実です。前のページでも小学校の児童数が統計上では1,428名となっておりますが、実際には1,579名いますから、120～130人多いということになりますし、そういった意味では年によっても多少のずれがあるということですが、両方の数字から追っても、約半分くらいになってしまうのではないかとということが、これを見ていただければわかるということで、資料を追加させていただきました。また、御確認をお願いします。それから、皆さんに会議録を郵送させていただきました。こちらにつきましては、前回はあまり委員の発表がありませんでしたので、こちらを確認して市のホームページに掲載します。今回の2回目からは皆さんの発表が当然ありますが、それを含めた会議録をホームページに掲載させていただく予定です。こちらについては、委員のお名前は入れないで、委員A、委員Bという形で発言者が特定されないようにさせていただきます。事務局側と、申し訳ありませんが先生方はお名前が載るようになりますので、御了解いただきたいと思っております。会議の録音を聞いて書き起こしていただきますので、でき次第、皆さんにお渡しします。私の発言のニュアンスが違うなどということがありましたら御連絡いただいて、その確認ができましたらホームページへアップしたいと思っておりますので、御協力をお願いいたします。

事務局からの説明が長くなりましてすみません。それでは、進めさせていただきます。

最初に教育長から一言、御挨拶をいたします。

2 教育長あいさつ

○教育長（河原崎 全） 改めまして、おはようございます。週初めの早朝からお集まりいただきまして、ありがとうございます。ここ2、3日、急に冷え込んで、この土日は朝の最低気温も10℃を切るくらいになってきたものですから、また季節が1つ進んだなと思っております。この頃の新聞を見ていると、ほかの市町でも学校の統合等についての記事をいくつか目にすることがあります。お隣の牧之原市もそうですし、掛川市もそうですし、また菊川市も学園構想等を進めております。そういう中で高校も、皆さん御覧になった方もいらっし

やると思いますけれども、地元の池新田高校と、西側の横須賀高校との再編統合も、2、3週間前に何回か記事になっていたと思います。今回の場合は、横須賀高校の地域の方がこの計画を考え直してほしいというような内容の記事だったのですけれども、確かに地元としては学校が無くなるということは大変大きなことで、これはもちろん池新田高校があるこの地域にとってもそうなのですけれども、地域の方からすれば、今まであったものが無くなっていくというのは、いろいろな意味で生活に影響があるものですから、その気持ちも大変よくわかります。ただ、子供たちが減っていく学校の規模を考えていくと、今年度から横須賀高校も池新田高校も1学年3クラスになりました。中学校はどうかというと、今、浜岡中学校は5クラス、御前崎中学校は4クラスあります。この中学生が1つ上の学校に行ったときに、中学校よりも規模が小さい学校に行きたいのかということもありますし、学校の規模が小さくなっていきますと、選択する授業の種類が減りますし、部活の数も減っていきます。先生方の数も減ります。そうなっていくと、あれもやりたい、これもやりたいという希望を持った子供たちにとって、それを叶えることができる環境なのかということも考えていかなくてはいけない課題だと思えます。子供たちにとって何が1番いいのかという子供ファーストで考えることと、地域においては、学校に限らず、金融機関、農協などのいろいろな施設が地域から無くなっていくと、その地域に活気が無くなっていくということで、それを心配される方々もたくさんいらっしゃいます。その辺りをどのようにうまくバランスをとっていけばいいのかということがポイントだと、私は思っています。確かに人口は減っているものですから、このままではよくはないのですけれども、その中で、高校は魅力のあるところに多少遠くても行ってしまふものですから、魅力がないと、人が集まらなないと、高校というものはどんどん縮小していきます。その反面、小中学校は、どこかに行きたいといっても、基本的には地域の学校へ行くことになっているものですから、そここのところではある程度の人数は確保されますが、その分、地域との結びつきは高校以上に強いと思えますので、やはり地域の意向は大きいと思っています。そのようなところをこれからも心に留めながら御検討いただければありがたいと思います。今日は学校規模について話し合いということですので、勉強させていただきたいと思えますので、よろしく願いいたします。

3 テーマ 学校規模 1学校のクラス数 1クラスの人数について

- ・個人発表
- ・グループワーク

○司会（教育総務課長 高田和幸） ありがとうございます。それでは、本日のテーマは、1つの学校のクラス数、1クラスの人数についてという2つのテーマでございます。以降の進行につきましては、堀井委員長にお願いしたいと思えます。よろしく願いいたします。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 進行を務めさせていただきます、常葉大学の堀井と申します。よろしく願いいたします。まずは、前回、皆様をお願いをして会議を締めさせていただきましたけれども、1学校のクラス数、それから1クラスの人数について、どのような意見がでて、周りとのやりとりがあったのか、ざっくばらんにまず1人ずつ御意見をいただいて、そのあとその意見を深掘りするということで進めたいと思えます。その後、教育委員会でグループ分けをやっていただいたということですから、今日は欠席の方もいらっしゃいますけれども、3グループに分かれてグループワークを行いたいと思えます。グループで出てきた意見の発表は、各グループに入った事務局の方々にお願いしたいと思えますので、よ

ろしくお願いいたします。

それでは今日の2テーマであります、1学校のクラス数、1クラスの人数について、各委員の方々からざっくばらんに、こんな意見がでましたよとか、あるいは、御自身の意見はこうですとか、その辺をお話しいただければと思います。

○司会（教育総務課長 高田和幸） 順番はどうしますか。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） どういう形にしましょうか。

○司会（教育総務課長 高田和幸） おまかせします。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） それでは、今日はお休みの方もいらっしゃると思いますが、順番にお名前を呼ばせていただきます。まずA委員さん、今のテーマでどんなお話があったのかというところをお話ししていただければと思います。よろしいですか。前回の宿題というか、地域や周囲で意見を聞いてみてくださいという話だったものですから、もし無ければけっこうですけれども、お願いします。

○検討委員A まとまりませんが、私自身、教師として中学校に長くいたものですから、中学校というのだいたい40人学級で来たものですから、36、7人くらいでずっとやってきたわけですので、現在の小中学校を見ると、20人から30人くらいという形であるものですから、その辺りの差がどうなのかなというところもあります。35、6人でやっていたときは、やっぱり教室にいっぱいなものですから大変だなというところもあったりもしましたけれども、人数が多だけにそれなりの活力があったと思います。授業での活動とか、そういう点では動きもできたり、意見も活発に議論したり、そういう点では発表活動もやりやすかったなという点ではありますが、人数が多だけ逆に1日声も掛けられなかったような人も結構やっばりいたりするところでは、1人1人の子供たちの気持ちもすくえなかったというか、見えていなかった面もあったのかなと思ったりもします。20人くらいになれば、その逆の感じで本当に1人1人に声を掛けることができるし、対応もきちんと見ることができる点ではとてもいいかなと思います。それから、発表活動なども、今まではグループの代表だったのが、人数が少なくなると1人1人が発表をきちんとできるという点でいいのかなと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。前回の流れということで、お話しいただきました。それこそ、今年の3月に法律が改正されて、35人学級という、ただ、静岡方式というものが前からあって、35人学級を静岡は率先して実施していました。35人と言いながら、25人の下限を前は設けていたものですから、実質的には多くなるクラスもあったようです。

御経験からお話しいただきました。ありがとうございます。唐突な感があるということでしたけれど、すみません。今日はそういう流れで進めることになっていますので、お許してください。それでは次の方をお願いします。

○検討委員B 幼稚園で保護者の皆さんに少し聞いた辺りでは、クラス数というよりも、1クラスの人数があまり多いと先生方が大変かなと。細かなところを見ていただくのに御苦労があるかなというような意見がありました。私自身も1クラスの人数があまり多いのはちょ

っと大変かなというのを、参観会とかに行っても、先日も小学校の参観に行ってきましたけれども、集中が途切れちゃっている子がいるかなというのがすごく気になりました。子供は中学校にも行っていますが、クラスの大きさに対して子供の人数が多いかな、いっぱいだなというのを、ぱっと入った時点で思うので、1クラスの人数があまり多くないほうがいいのかと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。中学校は、浜岡中学校ですか。

○検討委員B はい、浜岡中学校に行っています。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 浜岡中学校は新しい建物ができたばかりですが、35という結構多いかもしれませんね。

○検討委員B そうですね。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 今、幼稚園という視点がありましたけれども、これも一応、小学校1年生、小学校2年生は、幼稚園とのつながりの中で、全国も先行的に基準が35人になっていました。ありがとうございました。

答えにくい方もいらっしゃるかもしれませんが、個人の意見でも結構ですし、その辺は本当にざっくばらんにお話いただければと思います。次の委員、お願いします。

○検討委員C 私も幼稚園でいろいろ聞いたんですけど、やっぱり聞いた感じだと皆、ぴんと来ていないような感じでした。何クラスで、人数はと言われても、ちょっとあんまりよくわからないなという感じだったのが、一応現実です。私の経験で、参観会の感じからすると、やっぱり30人とか35人がちょうどいいのかなという感じはするんですけど、私の子供もそうなのですが、テレビやタブレットを見る機会が多くなって、視力がちょっと落ちている子供が多いので、あまり人数が多くなってしまうと、後ろのほうで黒板が見えないという子が、高学年になってくると増えるのかなということを加味すると、35人より下回ってくるほうがいいのではないのかなとは思っています。ミニバスを教えているのですが、視力が悪い子が高学年には多いので、黒板とかの状況を加味すると、人数はこれ以上増やすと後ろの子が見えなくなってしまうと、先生の席割りとか席替えが大変ではないのかなとは思いました。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。35人を超えると難しいことがあるのではないかということですね。今、タブレットの話が出ましたけど、武井先生とも少し話をしたのですが、適正人数といっても、これもICTが入ってきて、ICTを使うということで学習の方法が変わると、人数が単純に多いほうがいい、少ないほうがいいと言にくいところもあります。目が悪くなっている子がいるのではないかということでした。ありがとうございました。それでは、次の委員、お願いします。

○検討委員D 私が特に意見を聞けたわけではないんですけど、子供が4人いて、上が小学生なのですが、この子が人の話を聞けない集中力がない子なので、普通に学校は行っているのですが、やはり、あまり大人数だと見ているのも大変なのではないのかなと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） いわゆる気になる子、なかなか集中できない子、そういう子たちのことを考えたらどうだろうということですね。ありがとうございます。それでは、次の委員、お願いします。

○検討委員E 皆さんと大体意見は同じ感じですか。もし、クラスを少なくして人数を多くするか、クラスを多くして1クラスの人数を少なくするかというのだったら、やっぱり1クラスの人数を少なくしてクラス数を多くしたほうがいいと思います。周りに聞いた話なのですが、小学校ごとにクラスの人数が違うのですよね。それで、中学へ行ったときに学力の差とかがあるよということ、ちょっと耳にしたことがあるんです。どうしても、1クラスの人数が多いほうが目は届きにくいので、少ない人数でやったほうが、先生目の届くし、生徒も集中できるというか、そういうことを以前、耳にしたことがあります。あまり少なくしてもということもあるので、やはり30人前後とか。私たちの頃は本当に40名以上いた感じだったので、今はそれぐらいのものは考えられないと思うので、できる限り少ないほうがいいなとは思っています。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） クラスの人数とクラス数の関連ですね。ありがとうございました。次の委員、お願いします。

○検討委員F 私自身、子供は園に通っていて、学校に通っている子がいないので、学校のクラス数やクラス人数とか、自分の中でぴんと来ないところが多いのですが、先日、小学校の説明会のときに、来年度の1年生のクラス数が1クラスだったので、正直ああ少ないなと。1クラスだと少ないなと感じたのがあって、もうちょっとクラス数があってもいいのかなというのは思いました。人数とかは、実際に授業を受けているのも見ていないのでわからないのですが、それはちょっと感じたところです。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） お子さんの通う園は、同じ年齢でクラスが2クラスとかあるのですか。

○検討委員F ないです。園自体もそんなに人数は多くありません。地区の同じ年齢の子が全部で20何人くらいしかいなかったのが、ちょっとびっくりしました。自分の頃はもっと人数が多くて、2クラスとかあったのが普通だったので、こんなに少ないんだと思いましたね。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 今、委員に入っている皆さんは、基本的にこれから小学校にあがるというお子さんがいますので、今後のことを考えて意見をいただいています。今の視点は非常に重要なものだと思います。では、次の委員、お願いします。

○検討委員G 私の地区は、小学校は大きいけれど、子供はめちゃめちゃ少ない。これから増えてくるかというのと、若い人に聞くとあまり増えてこないよと。子供が家に帰ってくるのを見ると、疲れているんですよね。人の少ないところで授業を受けていて、環境的には勉強するのにいいかもしれないけれども、他のいろいろな運動をやったり、グループ活動をやったり、意見を交換したりというのは、相手が少ないので、少ない相手と6年間付き合っただけで中学へ進学して人数が増えると、おどおどしてしまうのではないだろうかという感じはします。

ね。でも、中学校の1クラスの人数は、文科省が言っているとおり35人ぐらいで妥当だと思います。私の頃は、1クラス50人ぐらいで、中学校は1年、2年、3年で1,800人ぐらいでした。その時の良さは、油断して、遠慮していたら、蹴落とされてしまうよと。競争ですからね。私たちのときは、競争して、人を乗り越えてでも上に行かないと、生きていけないような頃でした。甘やかして育てたって、それはなんでもないですよ。今では考えられないようなことですが、先生が子供をぶん殴っても、学校にお世話になっているからと、親は何も言いませんでした。授業もすごく大切だけれども、相手が何を考えているのか、相手はこんな人だけれどこうすればうまくいくとか、そういうことに一生懸命で、今みたいに皆スマホを持ったり、パソコンを使ったりしながらどちらかという自分で選ぶよりも、人間、アナログですね。人の交流、心のつながりを暮らしの中でうまく育てていくには、人数もさながら、どういう教育をしていったらいいのかというのは、昔と大分違うのではないですか。だから、私たちぐらいの年代からすれば、30人から35人ぐらいが妥当だと思います。目が届きますのでね。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 今、昔は人数が多かったというお話がありましたが、せめて30人から35人ぐらいあったほうがいいのではないかとということですね。

○検討委員G そうですね。そのくらいあったほうがいいと思います。あまり少ないと派閥ができてしまうので、多いほうがいいと思います。多いと派閥ができにくいです。10人くらいだと必ず分かれるから。50人くらいだとなかなか派閥が作りにくいから、悪い人がいるけれど、いい人もいます。派閥ができてしまうと、悪い人グループといい人グループに完全に分かれてしまうから、そこで先生が気付かなければ、おかしなふうになっていくのではないのかなと感じます。昔より大分環境が良くなったとは思いますが。時代があまり進むのも好きではないけれども、そうかと言って逃げられないから、人の心と心の付き合いができるような、そういう面も考えてクラス編成や人員を考えてもらったほうが、強い子供が育つと思います。強くなくては生きていけないから、そういうことを考えると、30人か35人ぐらいがいいと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 集団教育ということの競争力の問題ですね。あまり少なすぎると、という。

○検討委員G そうです。少ないと仲良しグループになって、だめになってしまうと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。ざっくばらんに御意見と、御経験の中でお話をいただきました。このあとグループワークになりますが、武井先生から何かコメントや感想がありますか。

○検討委員（静岡大学教授 武井敦史） 皆さん、答えにくいですよ、正直言って。学校の先生でもないです。ポイントは、別に子供の数を操作できるわけではありませんから、先生の数だって人を雇えば人件費がものすごくかかりますから、ある人数、ある子供とある先生でどういう教育をしたらいいかということです。実はそのからくりは結構柔軟に今はできます。例えば、ある先生が1つの学校だけで教えるだけではなくて、兼務申請をすれば、

他の学校を同時に教えることができるし、子供が移動して一部の授業を一緒にやることだってできるし、地区でまとめて教育活動をする事だってできるので、いろいろな可能性があって、そういうことで考えていくことが良い教育につながるだろうと思います。皆さんが考えることは、人数が少ないか多いかではなく、良い教育ができるかできないかということです。要はそこですから、そこに焦点化していくことができることが重要だと私は思っています。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） それでは、今はそれぞれの委員の視点で、あるいは御経験からお話がありましたけれども、グループの視点が入っていませんので、各グループでやり取りをしていただきまして、グループでまとまった意見を発表していただく形で内容を深めたいと思います。時間は20分で、グルーピングの説明をお願いします。

○司会（教育総務課長 高田和幸） それでは、今から机を動かして話をしたいと思います。グループは、本日の資料についています。3グループに分けさせていただきました。分け方の意図ですが、今回は別に何が正解というものはありませんので、みんながどう思っているのかを、より活発に話ができるように、少し権威のある方は別で、そうではない方はざっくばらんにというような意図で組み合わせをしましたので、20分間、本日のテーマに沿って好きなこととお話ししていただければと思います。今から事務局が机をセットしますので、荷物と名札をお持ちになって、グループの場所へ移動をお願いします。

[グループワーク]

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） まだ、いろいろ御意見がおありだと思いますが、そろそろ時間ですので、それぞれのグループの御意見を発表していただきたいと思います。Cグループから発表をお願いします。

○Cグループ（教育総務課長 高田和幸） よろしいですか。Cグループから発表ということですので、発表させていただきます。

いろいろなものをざっくばらんな話をさせてもらいました。大昔って言うと怒られる、御自身の小学校時代の話から始まって、ずっと話をしたのですが、Cグループの保護者さんは、お子さんがこれから小学校にあがる方でした。保護者としては、小学校の時は友達をいっぱい作ってほしいということと、たくさん的人数の中で社会性を学んでほしい、それから体力をつけてほしい、人間力を上げてほしいということから、1学級30人くらいか、35人くらいの人数がいて、1学年3クラスくらいあると、全部で90人くらいなので、2年に1回のクラス替えを経て、皆と付き合いができるようになって、最後は90人の顔と名前が一致してお話ができるような関係がつくっていただければということで、お話がありました。もう少し人数が多くていいのではないかという御意見もありましたが、そういう中でグループのまとめとしては、30人から35人くらいのクラスが3クラスくらいあって、それが6学年あったら、すごくいい学校ではないかというお話になりました。特に学区がどうという話ではなくて、理想の学校としてそういうのがいいというお話が出ました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、Bグループをお願いします。

○Bグループ（教育総務課係長 坂本浩長） Bグループです。教職経験をお持ちの方がいまして、その振り返りを含めて意見をいただいたり、過去の小学校統合についても交えたりしながら意見交換をしました。まず、1クラスの人数ですが、発表の中でも出ました、多くないほうがいいねという目線が、多くなりすぎないほうがいいねという目線となり、上の目線であったのですが、いろいろな意見を交わしていく中で、今度は下を見てみましょうということで、グループの中では、20人という少ないのではないかという意見になり、30人程度が理想的な形ではないかということなのですが、一方、既存の学校のクラスの広さがありますので、お子さんのクラスが31人の学級なのですが、少し狭いような気もするという意見がありましたので、やはり箱と人数の関係があるのかなということが意見なのかなと思います。1クラスの人数をこうやってみていったときに、学校の中のクラス数というのは、具体的に数字を言いにくいのですが、クラス替えがあってほしいということは、複数クラスであってほしいということです。理由としては、やはり子を持つ親として、自分の子供というわけではないのですが、その塊、1クラスの中で悩んだときに、逃げるという言葉が適切かわかりませんが、リスタートできるクラス替えという場面はあってほしいというような意見も出ました。それから、両方に係ると思いますが、学校の行事というもの、合唱とかそういったときは、やはり人数があって盛り上がるので、人数確保はいずれかの形で望むべき姿だなということが出ました。それから、少し先のことになりますが、例えば、学校が統合されたときに、遠くから通う、例として森町の記事を見た委員もいたのですが、通学が山を越えて長時間かかることへのバス通学への不安もあります。ということなのですが、一方、今、徒歩通学で集団登校をしています、人数が少なくなってしまうと、帰りが1人になるというお子さんもいるので、そこを考えたときには、逆にバスのほうが安心なのかなという意見もありました。他にも、内部競争をもたらすためにも、人数は結構必要だという意見、子供たちの目が悪くなっていることから、ICTの環境が進むのはいいが、そこを加味した新しいクラス形態、学校づくりということも検討してほしいということが意見です。以上になります。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、Aグループです。

○Aグループ（学校教育課指導主事 澤入基裕） Aグループになります。学校教育課の澤入です。付箋や模造紙は使用しませんでしたので、話をしたことを報告させていただきたいと思います。まず、たくさん職員で子供を見ること、丁寧に見ていくこと、いろいろな子供たちの表れがある中で、そういったことは非常に重要になるかなということと、そうしたことをしていくことで教師の育成も進むのではないかという意見が出てきました。ただ、学校数のことを考えたときに、定数の問題ということもありまして、70人だと35人学級を2つ作ることになります。36人になると18人の学級を2つということで、36人学級というものを作れないという定数というところもあります。では、35人を2クラスというものと、18人を2クラスというものを考えたときに、やっぱり18人2クラスのほうが、丁寧な指導ということを考えるといいに決まっているのではないかということも考えに出てきました。ですので、上の人数を考えるというよりも、最低の人数というところに目を向ける必要があるのではないかなという話が出てきました。そう考えたときに、学校全体で120人を切ってくるとどうなのかなと考えなくてはいけないことが出てくるのかなということもありました。そ

ういったことを考えると、北小や御小は、少しずつその人数に近づきつつあるのかなということがあります。そういった面を考えると、どのように質のいい教育を提供していくか、作っていくかということになると、やはり学校間の連携の重要性ということは非常に重要になってくる部分で、御前崎は、スクラムプランという基盤というものがあるので、それを生かした教育を推進する必要性を感じているところです。小学校と中学校を考えたときに、別で考える必要性というものもありまして、例えば、今、御中だと校舎の建て替え、老朽化ということも考えなくてはいけないのかなと。今、御中の位置が牧之原市にあるということも考えなければいけないということもあるのかなというふうになります。御中の人数でいうと、3学級か4学級、来年の中1は3学級になるのですけれども、大体、3分の1が地頭方小学校の子になるということがあります。人数が少ないけれども、部活を維持するとか、そういうところも課題になってきたりとかということもあるので、少し小学校と中学校とで問題を切り替えてみる必要性もあるということで、校舎の建て替えが必要になったときにそういうことも考える必要性とかもあるのかなというふうになりました。それぞれ中学校区というものもあるので、小中の連携の重要性であったり、小中だけではなくて、保幼、保育園だったり、幼稚園だったりとの小学校の連携、そういったところも考える必要性というものは今後あるのかなという話をさせていただきました。以上になります。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。今、澤入先生が発表したAグループの意見というのは、今日、欠席の伊村先生が学校の先生方からも御意見をいただいた内容も踏まえて整理したようなところもあります。

ありがとうございます。大変、活発な意見のやりとりがあって、いろいろな問題を深めていただけたのだらうと思います。共通の部分も結構あったと思うのですけれど、Aグループは我々ですけど、C、Bグループ、あるいはAグループの発表を聞いて、武井先生からコメント等をいただければと思います。

○検討委員（静岡大学教授 武井敦史） 皆さん、どうもありがとうございます。今、皆さんからいただいた御意見等を聞かせていただきまして、それから、私のわずかばかりの経験を加えて、この会の目的は多分ざっくりばらんに話すこと自体に目的があるわけではなくて、話す中で学校がやっぱり良くなっていくことが何より重要だと思いますので、そこにつながっていくにはどうしたらいいかということについて、私なりのヒントというか、私なりの思いをお話しさせていただければと思います。まず、最初に、クラス規模についてですけれども、いただいた意見とはそれほど違わないと思うのですけれども、ざっくりこんな整理ができると思います。クラス数はもちろん多ければ多いほどいいというものではなくて、大きすぎても問題があるけれども、御前崎市内の場合には大きすぎて問題になるほど規模の大きなところは無いので、考える心配はないということで、小さいほうの問題をみると、大きく3つくらいの段階を考えていったらいいのではないかと思います。1つは、複数の学級を配置できるかどうかというラインです。中学校だともう少し大きくて、4クラスくらいあったほうが理想で、1番どこがいいですかといえば、だいたい学校の先生方、それから文科の手引きもそうですけれど、やっぱり小学校で複数規模、小学校、中学校ともに12クラスくらいあるとベストですよということは言えるわけです。だから、そこがまず1つの、1番理想がどこかといったらそこだと。けれども、それを切っていったら直ちに教育活動が難しくなっていくか、子供の交際範囲が減っていくかということ、そんなことはなくて、実際に実質のほうの問題が生じていくのはどの辺かと考えると、これは1学年20人というラインなのではない

かと私は思っています。20人ということは、男の子、女の子がそれぞれ10人ずつくらいです。例えば、小学校6年間で10人より同じ学年の子が少ないと、やはりその交際範囲には限定があり、その中で交友関係が少なくなっていくというのは、実際にあるだろうと。実際、ほかの地域でも再編の会議をやると、1校100人を切ったり、1学年20人を切ったりすると、保護者がほかの地域へ移動しはじめます。自分の入る学校を、よりコミュニケーションを活発化するために、例えばアパート住まいであればそれを移るとか、実家があってもほかの地域への転居を考えてみるということをしはじめるのが、大体そのくらいのラインだと考えていいと思います。それから、いよいよかなり深刻になってくるのが、いわゆる複式が出るということです。低学年については、解消の手立てがありますが、2学年で16人を切ってくる、1学年あたり8人平均を切っていくと複式が出始めますので、そうなってくると、例えば、カリキュラムを1人の先生が2つの学年と一緒に教えなくてはいけないとか、集団スポーツは相当難しくなっていくので、そうなってくるといよいよそれは子供の教育にかなり影響を与えることは間違いありません。ただ、忘れてはいけないことは、人数が少なければ少ないことの良さもあるということです。目が行き届きやすいであるとか、人数が少なだけで地域との連携が強くなっていくとか、逆に少ないからこそ外に出て行って広い世界を知ろうという動機が働いていくというような良さもあります。だから、一概に悪いということではなくて、状況を逆手に取った教育をすれば、下手に多いよりはずっと良い教育ができるという可能性はあるということを考えておくことは必要だと思います。このように考えて、これからの御前崎の学校を良くするためのヒントがどこにあるかということ、まず1つはクラスの人数で、まさに今日の議題はクラスの人数は何人がいいかという話だったのですが、これからもクラスの単位で教育をしなくてはならないという前提は疑ってみる必要があると思います。例えば、1クラス18人が2クラスあったとします。その2クラスを1人の先生がまとめて教えても、学級数が確保されていれば法律上は問題がありません。そうすると、35人学級2クラスと比較したときに、先生の数は2倍、子供の数はほぼ変わらず、できるところは一緒に教育をしていきます。教室が分かれていても、オンラインでつなげば、直接、指名することも問題なくできるので、そうなると、クラスの単位が何人かということで教育の質が判断されるということがこれからもずっと続いていくかということ、おそらくそうではないのでしょうか。GIGAスクールという仕組みが入ってきて、少なくとも学習活動の一部はパソコンと向き合いながら1人1人の進度に合わせて学習を進めていくということになるし、もう一方で入ってくるのが、非常に質の高い講義をオンラインで提供することです。この2つは間違いなく入ってきます。それに加えて、例えば、ある先生が1教室で教えて2教室で聞くということもできるし、双方向で誰かを指名して子供が答えることも可能になります。そう考えると、1番考えなくてはならないのは、学級当たりの数ではなくて、先生と生徒の総数、これを両方ともある程度維持しておくことが重要だと考えます。それと同時に、クラス単位で考えるということが出てきます。それから、もう1つ考えなくてはならないこととして、学校間、または学校種間のネットワークです。例えば、少し離れていても、御前崎小と白羽小と一緒に教育活動の一部を行うということがあっていいわけです。子供が移動したっていいし、先生方がお互いに入れ替わったっていいので、それは兼務発令をすればいかようにもできます。学校の間で連携をすれば、先生の数はそれだけ増えます。保護者の立場から見れば、生徒の数が何人だということが重要かもしれないけれど、実は教育をする側の先生だって数が少なくなってくれば、特にこれから若手が増えていくので、そうするとお互いに自分の自己流の授業を見直す機会がないかもしれないです。単級だと、ずっと同じところで、同じ自分のやり方で教えていくしかない。こう考えると、先生方の成長だ

って止まります。これは、地域にとっては、かなり大きなことです。だから、学校間で連携を組んで、先生方のコミュニティというか、交際範囲を広げていく。それから、学校種間も同じように連携を含めて、中学校と小学校、小中一貫とか連携とか言われているように、それから小学校と幼稚園、保育園、これもつなげていくことができ、これらが一体になって、お互い連携がとれるようになると、そこでまた教育効果を高めることができるようになってきます。それから、最終的には学校というものがどこにあるかということが、地域にとっては非常に重要なわけですが、それイコール学校がその1か所にしかないと考える必要も長期的には私は無くなっていくだろうと思っています。例えば、具体的にいうと、小学校4年生までは今の小学校の校舎で、小学校5年生以降は中学校の校舎に集まって授業を受けますと、こういったことが例えば京都の学校などで一部始まっています。そう考えると、どこに学校があるかということは、地域にとって重要なわけけれども、それはイコール学校として6年間同じ場所に置かなくてはいけないという大前提で考えるのではなくて、そういうことが起こってきたときにも、地域も活性化できるし、学校の生徒もある一定数を維持できるような仕組みをどうやってつくろうかということこそ、やっぱり私は考えるべきなのではないかと思います。だから、一言でいうと、クラスがあってクラスの中だけで教育が行われるのだという考え方を捨てる。そうすると、クラスの中と外でも子供たちを教えられるし、自分の学校以外の場所でも生徒は育つし、更に地域の中でも育っていきます。このように、どこまで子供の成長の場所を今までの固定観念から一歩踏み出して広くできるか。そうすれば、万の単位の人が住んでいる地域であれば、例え人口が減ったとしても教育は豊かです。それから、関係も非常に多彩です。しかも、きちんと人たちが見てくれますとなれば、まちの将来は明るいということになるかと思えます。そんなところを次回以降また深掘りできたらいいなと考えます。私からは以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。委員の皆さん、前回配布の資料もお持ちですか。その中に文科省の手引という見出しがあるのですが、これは2015年、平成27年1月に『公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引』というのが出ています。少子化に対応した活力ある学校づくりに向けてということで、武井先生のお話というのは、まさにこの御前崎の特徴をいかして、どういうように活力ある学校づくりをしたらいいのかというお話が結構あったかと思うのですが、実はこの中で言われている内容が、望ましい学級数の考え方、これはクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を編成したり、同学年に複数教員を配置するために1学年2学級以上が望ましいという考え方を出しています。Bグループ、Cグループの発表からも、まさにそういう内容で意見がまとまったのだなと思います。更に言いますと、最初に申しあげましたように、静岡県はある意味、先を行っているところもあって、平成29年、2017年に小学校3、4年生、30年度は5、6年生、31年度は中学生と段階的に25人の下限を撤廃して、静岡式35人学級を考えています。下限25人をなぜ設定していたかということ、人数が極端に少ない学級よりも、ある程度の規模を持たせたほうが、学習面、生活面ともに互いに高めあうことができるという考え方からです。25人を設定することで数が多くなってしまったという問題があった撤廃されることになったのですが、やはりこの辺の問題意識がBグループ、Cグループの話し合いの中で出てきたのかなと思います。そういう意味では、委員の皆さんのお考えというのは、この手引きや静岡県の要綱に沿っていて、なるほどなと思いました。ただ、一方で、武井先生のお話にあったように、多岐に渡っていろいろな捉え方があるのです。私は前も自己紹介をさせていただきましたが、静岡に8年前に戻ってきて、5年くらい前から御前崎の

教育にいろいろ関わらせてもらって、勉強させてもらっているのですが、スクラムプランという形で、いわゆるコミュニティースクールという活動が、御前崎は結構早く入ったのですが、スクラムプランが御前崎流で、一挙に20何人くらい集まります。集まるのですか、そんなにと言いますと、集まります。だから、御前崎の方々は、教育についてみんなで考えようというつながりが強いのかなと、私は思いました。そういう意味では、今日、人数のことをいろいろお話しただいて、ある程度、御意見をまとめていただきましたけど、それをやるにはいろいろ問題点もこれからの教育の問題を考えるとあると思うのですが、それを乗り越えるものとして、御前崎独特のスクラムプランのようなつながりを大切にして考えていく必要があるのかなと思います。今日、実は1冊、古い本を持ってきました。建築の人たちと一緒に勉強会をすることが多いのですが、建築の方々がよく出されるのが、すごく古いのですが1964年にアメリカで出版された『大きな学校、小さな学校』*1という本です。ちょっと古いのですが、大きい学校がいいのか、小さい学校がいいのか、幼稚園、小学校、中学校、高等学校など、いろいろな事例をまとめています。どちらがいいか結論的に言うと、はっきりわかりにくいですが、ただし、「学校規模という錯覚」というものがあるって、ここが1つのポイントかなと思ったのですが、生徒数が多い学校は強い印象があって、小規模の学校は印象が薄い。しかし、学校内部に入ると、それは違ったものになる。これで再編について考えたときには、やはり学校内部で子供の視線から捉えたときにどうなのかということです。大きい箱の中に子供の数が少ないと寂しいと大人はつい見えてしまうのですが、その中で子供たちが活性化して動いていれば、それはそれでまたいいなという話になりますし、先ほども言いましたように、御前崎はスクラムプランでいろいろなつながりの連携が行われますので、そういう中で少なくとも活性化しているということがあれば、積極的に見極めて評価しながら、この人数や適正配置の問題などについて考えていけばいいと思います。今日は大変勉強になりました。ありがとうございました。

あとは、次回のテーマについて、事務局からお願いします。

○（教育総務課係長 坂本浩長） ありがとうございます。次回の連絡をさせていただきます。第3回の検討会は、また通知を出させていただきますが、年が明けまして、1月24日（月）9時30分から市役所3階301会議室で行います。最初の会議で説明させていただいたとおり、次回のテーマは「望ましい通学時間、学区の考え方」についてです。進め方につきましては少し検討していきますが、今回と同じようなイメージで皆さんに来ていただければと思います。また、テーマについては、次回の検討会までに今回と同じように周辺の方々とお話しをしてきていただければありがたいです。連絡は以上になります。

4 閉 会

○司会（教育総務課係長 高田和幸） 長時間に渡って、1人ずつ発表していただいたり、グループワークをさせていただいたりして、ありがとうございました。次回は1月24日になりますので、今回と同じようにお話しができたと思います。長時間お疲れ様でした。最後に互礼を交わしますので、御起立をお願いします。お疲れ様でした。

[互いに礼]

* 1 『大きな学校、小さな学校 一学校規模の生態学的心理学一』 R. G. バーカー, P. V. ガ
ンプ著 安藤延男監訳 北島茂樹訳 深尾誠訳 新曜社刊 (1982 年) 原題: Big school,
small school (Stanford University Press, US, 1964)